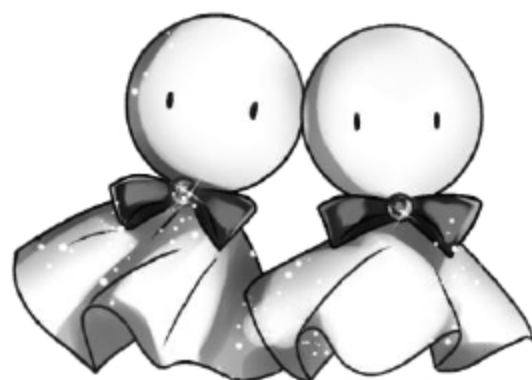




with you + with me

目次

一.	運命の向こう側の物語	4
二.	光みたいな君を見てる。	10
三.	子供のように似ている二人	20
四.	あなたの為にできること	28
五.	天気雨の君の匂い	42
六.	彼女の笑顔を陽だまりのよう	48
七.	ふたりぼっちの月夜の下で	56
八.	斜陽の降る街にさよならを	74
九.	ホームパーティの合間に	82
十.	光みたいな君に贈るもの	94
終.	贈る言葉	106



『贈る言葉』

いつもの家。いつもの天気。いつもの一人の時間。

窓の外、沈んだ田端駅を眺めていた。夏も終わりに近付きつつある今日。いつものように目を覚まして、いつものようにご飯を食べて、帆高がやってくるのを待っている。

ただ、今日は特別な日だった。嬉しいことと悲しいことでそれぞれ一つずつ特別な日になった。

だから、少し感傷的な気分になって私達の選んだ世界を眺めてしまう。憂う権利はないと分かっているけれど、それでもいつかこの世界が晴れることを願っていたくて。

ゆつくりと手を合わせて、祈っていた。忘れもしない六年前の今日のことを思い返す。

私が晴れ女になった日のことだ。病院から抜け出して、陽光が降り注ぐ鳥居を強く強く願いがらくぐったこと。

『雨が止みますように。お母さんが目を覚ましますように。もう一度三人で、青空の下と一緒に歩けますように』

願いは二つしか叶わなかった。それでも、叶うだけ幸せだったのかもしれない。最期にお母さんと話すことができたのだから。

何も言えずにさよならにならなくてよかったって思わないと、きつと私は耐えられなかった。ぽっかりと空いた心の穴を見ないふりして、現実に向き合わないとならなかった。

窓についた雨粒が線になって垂れていく様子が、あの時の病室と重なった。

私はつい先日二十歳になっていた。十九歳の四月から今日

に至るまで、やけに長く感じたのは風の影響が大きかったと思う。風は高校を進学する際に全寮制の高校に進んでいた。当然のように特待生として行くのだから自慢の弟だった。私達の金銭的事情や私が二十歳になって、未成年後見人制度も必要となるのも考えていたのかもしれない。

携帯電話でいつでも話せるようになったとはいえ、寂しいのは変わらなかった。一人分の生活が消えた家の温度は春でも、夏でもやけに寒く感じた。

一人で生活するのが当たり前で、やけに広く感じる部屋に空気に慣れていくしかなかった。

でも、慣れたからといって好きか嫌いかで言えば嫌いな方で。それはきつと、大切な人がいる喪失感を思い出すからだと思つた。もう心に穴は空いていないはずなのに、胸の奥がずきりと痛むような感覚。幻痛だと分かっているのに、それを抑えることが出来なかった。

こうして考えていると、また痛みを感じるように思えてしまつて、代わりに楽しかったことを思い出す。風がいなくなつて寂しいと何気なく帆高に話した時のことだった。

『陽菜さんが一人だと寂しいなら一緒に住むのはどうかな』

頬を赤くしながら照れている帆高はかわいくて、その好意に甘える形になってしまった。帆高の両親にも会いに行つて、緊張しながら不安もあつたけれど、私との生活を認めてもらった。私が成人した上でという条件はあつたけれど、学生からの同棲を認めてもらえただけで感謝しても仕切れないだろう。私の境遇や、身の上についても話をした上で、そう決めてくれたのだから。親もいない私に対して蔑んだ目を向けられなかった

のは、帆高から先に口添えしてくれていたからだと思う。こんな時も帆高はずっと優しくかった。

部屋の問題もそうだった。新しい部屋を探すことを帆高としては考えていたことだったのに、それを遮ったのは私の我儘だった。

ふと壁に飾られた幾つもの写真を眺める。家族の思い出の軌跡がそこにはあった。お母さんと風と私。小さい頃はこんなこともあったんだねって見る度に思い返してしまう。ここから離れると考えると、この思い出も無くなってしまうと思えて、大好きだったお母さんが今よりももっと遠くにいつてしまう気がして。

帆高には不便を強いることを承知で、私の家に引っ越してもらうことになった。私の提案に嫌な顔ひとつ浮かべずに快諾してくれた帆高の笑顔を出す。それだけで私は幸せ者だっと思えるのが不思議で、胸の痛みはいつの間にか温かさに変わっていた。

そして、その帆高と一緒に生活を始める日が今日。

今日の嬉しいことのほう。

逆に悲しいことのほうは、今日がお母さんの命日だということだった。

帆高が来る前に準備をしよう。この日の為に新しいお線香も、香炉もお鈴も揃えておいた。小さい机に写真を立てて、一式を並べた。

写真の中で笑うお母さんの姿を見る。ちっちゃな風と私に頬を寄せて、幸せそうに笑っている写真だ。綺麗好きで、笑顔を絶やさなかったお母さん。疲れた時の表情もあったけれど、私

達の前ではすぐに隠して笑っていた。子供の時じゃ分からなかったこと、気づけなかったこと、お母さんが私達の『お母さん』でいてくれたこと。たくさん、たくさんあり過ぎて、数え切れないや。

あの時、点滴の外されたシワシワになった手を取って、最期に交わした言葉。お母さんから貰った大切なお守り。

チョーカーとしては使わなくなった今も、お守りとしてずっと持ち歩いていた。命日の時にだけ私の手から離れて写真と一緒に線香をあげて、お母さんへお話するのが毎年の決まりだった。お母さんのお墓は建てられなくて、一緒に暮らしたこの家がお母さんとの絆が最も深い場所で、こうすることが正しい作法なのかも分からないけれど、空の向こうに一方通行でもいいから、私の言葉が届くのならなんて良かった。

今日はお母さんに帆高を改めて紹介する。そう決めていた。

帆高が私を両親に紹介してくれたように、私も帆高をお母さんに紹介するのだ。

改めて決意を決めた時、ちょうど携帯電話が震えていた。メッセージを確認すると、ゆっくりと玄関に向かい迎え入れる。

「こんにちは、陽菜さん」

「いらっしやい……じゃないね。おかえりなさい、帆高」

荷物をたくさん抱えた帆高に、少し気の早い挨拶を返すのだった。